◆ 新収蔵資料紹介（令和７年度４月）展示解説シート ◆

さまざまな編み方で形作る伝統工芸品 ～籃胎漆器～
（西健一郎氏収集資料より①）

会期：令和７年４月３日(木)～29 日(火・祝)

久留米市立六ツ門図書館展示コーナー

令和6年4月16日に寄贈された「西健一郎氏収集資料（第7次）」は、籃胎漆器 27 点と古文書類 167 点で構成されています。そのなかから、今月は籃胎漆器を紹介します。

籃胎漆器は、明治 18 年（1885）、久留米藩の御用塗師を勤めた川崎峰次郎、竹細工師近藤幸七、茶人豊福勝次が、竹かごに漆を塗って作る漆器製品を共作したことに始まります。やがて赤松商店などの生産会社が設立され、明治時代の終わりから昭和戦前にかけて全盛期を迎えました。現在は福岡県知事指定特産民工芸品になっています。

今回、美しさと実用性を兼ね備えた3つの作品を、編みの技法とともに紹介します。

●No.1 茶櫃

昭和戦前期　赤松商店

蓋表面：桝網代編み　蓋側面：縄目差し編み

身側面：縄目差し編み

●籃胎漆器の主な編み方

【網代系統】

網代編み（展示 No.2）、桝網代編み（展示 No.1）、連続桝網代編み

太目で平たい同幅の竹ひごを使い、交差を2本または3本飛ばしにし、目をずらしながら編む代表的な技法。

【輪孤系統】

二重輪弧編み、輪弧編み（展示 No.3）

竹ヒゴを放射状に組みながら編み上げる技法。

【丸編み系統】

菊底編み、二重菊底編み等

円を描くように連続に編み形を形成する技法。

【平編み系統】

四ツ目編み、六ツ目編み（展示 No.3）、亀甲編み等

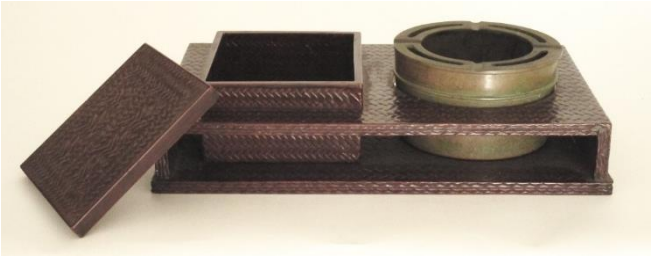
曲線（面）でなく平らに連続して編み広げる技法。

●No.2 煙草盆

近代～現代

久留米籃胎漆器合資会社

網代編み



●No.3 花器

近代～現代

輪弧(りんこ)編み、六ツ目編み

●籃胎漆器の生産を支えた会社

【赤松商店】

明治維新に伴う士族授産事業として、明治 16 年(1883)に設立された赤松社の後進にあたります。明治 41 年(1908)に社名を赤松商店に改め、翌 42 年(1909)に籃胎漆器の製造権を 2 代目川崎峰次郎から譲り受けました。昭和 20 年(1945)解散、翌 21 年(1946)、赤松商店の塗師井上隆人が井上籃胎漆器株式会社を設立し現在に至ります。

【久留米籃胎漆器合資会社】

明治 41 年(1908)に設立された川崎式籃胎漆器合資会社が始まりです。同社は、籃胎漆器創始者の一人である川崎峰次郎の次男協力のもと発足しました。明治 45 年(1912)に社名を久留米籃胎漆器合資会社に改め、籃胎漆器の生産を続けますが、昭和 21 年(1946)に解散しました。